

「名指導書で読む 筑摩書房 なつかしの高校国語」

ちくま学芸文庫、筑摩書房 2011年5月10日刊を読む

魯迅著 藤野先生

1. 一週間過ぎて、たしか土曜日の日、かれは、助手に命じてわたしを呼ばせた。研究室へ行ってみると、かれは、人骨やら多くの単独の頭蓋骨すがいこつやら——当時、かれは頭蓋骨の研究をしていて、後に本校の雑誌に論文が一編発表された——の間にすわっていた。

「わたしの講義は筆記できますか。」と、かれは尋ねた。

「少しできます。」

「持って来て見せなさい。」

わたしは筆記したノートを差し出した。かれは受け取って、一、二日してから返してくれた。そして、今後毎週持って来て見せるようにと言った。持ち帰って開いてみた時、わたしはびっくりした。そして同時に、ある種の不安と感激とに襲われた。わたしのノートは、初めから終わりまで、全部朱筆で添削してあった。多くの抜けた箇所が書き加えてあるばかりでなく、文法の誤りまで、いちいち訂正してあるのだ。かくてそれは、かれの担任の学課、骨学・血管学・神経学が終わるまで、ずっと続けられた。

遺憾ながら当時わたしはいっこうに不勉強であり、時にはわがままでさえあった。今でも覚えているが、ある時、藤野先生がわたしを研究室へ呼び寄せ、わたしのノートから一つの図を広げて見せた。それは下膊かほくの血管であった。かれはそれを指さしながら、穏やかにわたしに言った。

「ほら、きみはこの血管の位置を少し変えたね。——むろん、こうすれば比較的形がよくなるのは事実だ。だが、解剖図は美術ではない。実物がどうあるかということは、われわれはかつてに変えてはならぬのだ。今はぼくが直してあげたから、今後、きみは黒板に書いてあるとおりに書きたまえ。」

だがわたしは、内心不満であった。口では承諾したが、心でこう思った。——

<図は、やはりぼくのほうがうまく書けています。実際の状態なら、むろん、頭の中に記憶していますよ。>

学年試験が終わってから、わたしは東京へ行って一夏遊んだ。秋の初めに、また学校にもどってみると、すでに成績が発表になっていた。百人あまりの同級生のなかで、わたしはまん中どころで、落第はせずに済んだ。今度は、藤野先生の担任の学課は、解剖実習と局部解剖学とであった。

解剖実習が始まってたしか一週間目ごろ、かれはまたわたしを呼んで、上きげんで、例の抑揚のひどい口調でこう言った。——

「ぼくは、中国人は靈魂を敬うと聞いていたので、きみが死体の解剖をいやがりはしないかと思

って、ずいぶん心配したよ。まずまず安心さ、そんなことがなくてね。」

P357 ~ 359

2. 第二学年の終わりに、わたしは藤野先生を尋ねて、医学の勉強をやめたいこと、そしてこの仙台を去るつもりであることを告げた。かれの顔には、悲哀の色が浮かんだように見えた。何か言いたそうであったが、ついに何も言い出さなかった。

「わたしは生物学を習うつもりです。先生の教えてくださった学問は、やはり役に立ちます。」
実は、わたしは生物学を習う気などなかったのだが、かれががっかりしているらしいので、慰めるつもりでうそを言ったのである。

「医学のために教えた解剖学のたぐいは、生物学にはたいして役に立つまい。」かれは嘆息して言った。

出発の二、三日、かれは、わたしを家に呼んで、写真を一枚くれた。裏には、「惜別」と二字書かれていた。そして、わたしの写真もくれるようにと希望した。あいにく、わたしはその時、写真をとったのがなかった。かれは、後日写したら送るように、また、時おりたよりに書いて、以後の状況を知らせるようにと、しきりに懇望した。

仙台を去って後、わたしは多年、写真を写さなかった。それに、状況も思わしくなく、通知すればかれを失望させるだけだと思うと、手紙を書く気にもなれなかった。年月が過ぎるにつれて、いまさら改まって書きにくくなり、そのため、たまに書きたいと思うことはあっても、容易に筆がとれなかった。こうして、そのまま現在まで、ついに一通の手紙、一枚の写真も送らずにしまった。かれのほうから見れば、去ってのち杳^{よう}として消息がなかったわけである。

だが、なぜか知らぬが、わたしは今でも、よくかれのことを思い出す。わたしが自分の師と仰ぐ人のなかで、かれは最もわたしを感激させ、わたしを励ましてくれたひとりである。よく、わたしはこう考える。かれのわたしに対する、熱心な希望と倦^うまぬ教訓とは、小にしては中国のためであり、中国に新しい医学の生まれることを希望することである。大にしては学術のためであり、新しい医学の中国へ伝わることを希望することである。かれの性格は、わたしの眼中において、また心裡^{しんり}において、偉大である。かれの姓名を知る人は少ないかもしれぬが。

かれが手を入れてくれたノートを、わたしは三冊の厚い本にとじ、永久の記念にするつもりで、たいせつにしまっておいた。不幸にして、七年前、引っ越しの時に、途中で本箱を一つこわし、その中の書籍を半数失った。あいにくこのノートも、失われたなかにあった。運送屋を督促して捜させたが、返事もよこさなかった。ただ、かれの写真だけは、今なお北京のわが寓居^{くうきょ}の東の壁に、机に面して掛けてある。夜ごと、仕事に倦んでなまけたくなる時、仰いで灯火の中に、かれの、黒い、やせた、いまにも抑揚のひどい口調で語り出しそうな顔をながめやると、たちまちまた、わたしは良心を発し、かつ、勇気を加えられる。そこでたばこに一本火をつけ、ふたたび、「正人君子」の連中に深く憎まれる文字を書きつづけるのである。

P363 ~ 365

[コメント]

やはり魯迅著「藤野先生」は本書の中に収録されていた。大学など高等教育に耐えられるだけの教養教育の内容が問われて久しいが、大学を目指す人が高校時代に読むべき本とは何か、本書によって熟知する必要がある。高校生、及び高校生を教える先生方、必読の書。

- 2011年7月9日林 明夫記 -